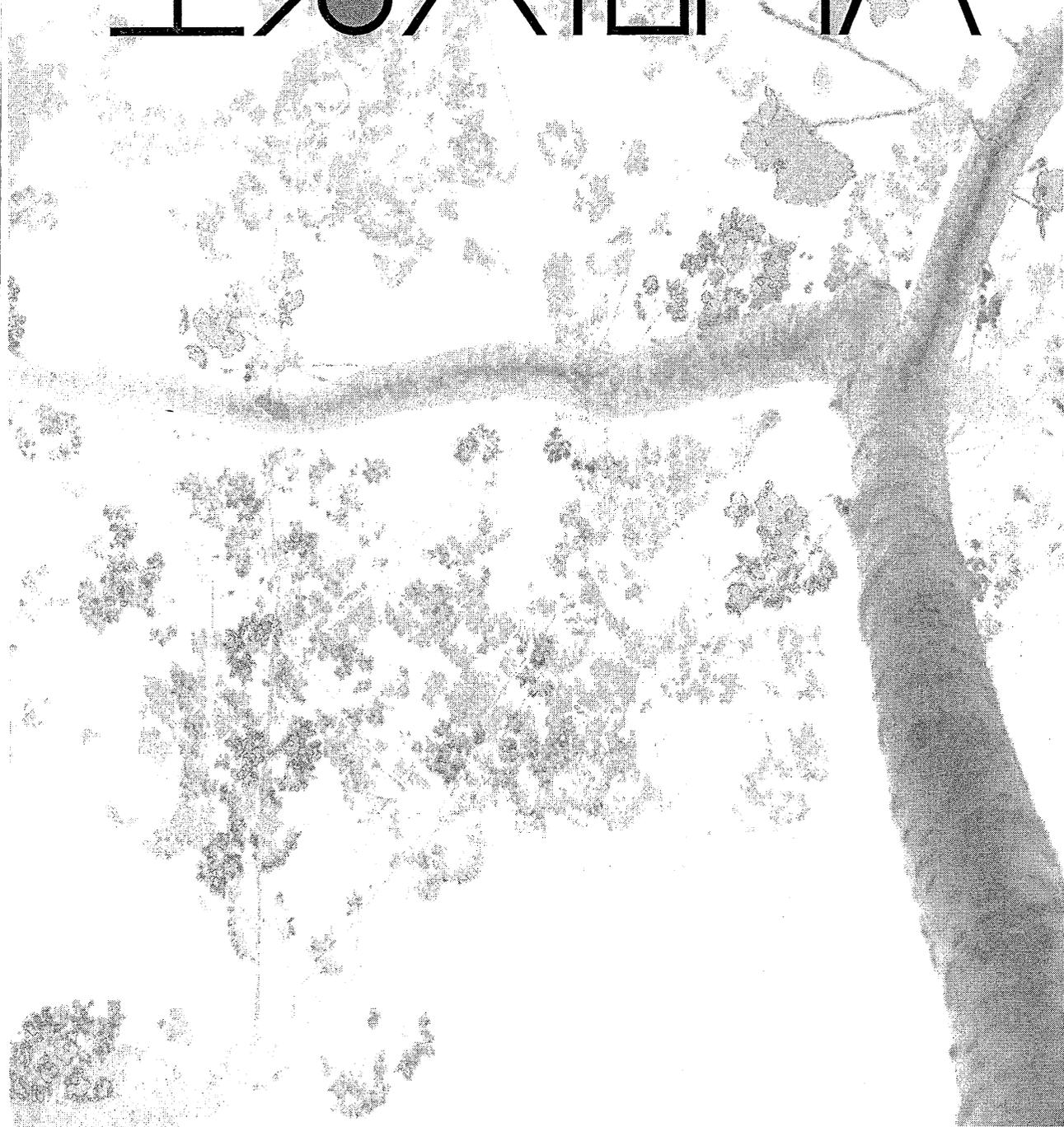


SEIKATSU BUNKA DOJIN

生活文化同人



# はじめに

2004年度生活文化同人事務局 小林一元

今年度の事務局を担当することになりました。

生活文化同人の創立メンバーではないのですが、

自分の独立時期とほぼ同時に参加し15年ほど経過しました。

その間、かかわり方の密度は一定ではありませんでした。

お受けするからには1年間、力を注ぐつもりですが、

皆さんの積極的なご協力が欠かせません。

夏の大会も含めて、新しい展開を考えなければならないときです。

同人の方それぞれが自発的な意志をもって

刺激し合えるような会にしたいと思います。

1年間よろしくお付き合いください。



--生活文化同人 2004年度事務局--

〒369-1203 埼玉県大里郡寄居町寄居1184-1

小林一元建築設計室 小林 一元

電話 048-581-2426 電送 048-581-9644

eメール e-sumai@yorii.or.jp

2004年度世話人選出

代表：吉田桂二

事務局：小林一元

会計：大塚広平

会報：佐々木亨

語る会：五十幡智子・中村文美

大平建築宿実行委員長：宮越喜彦

世話人

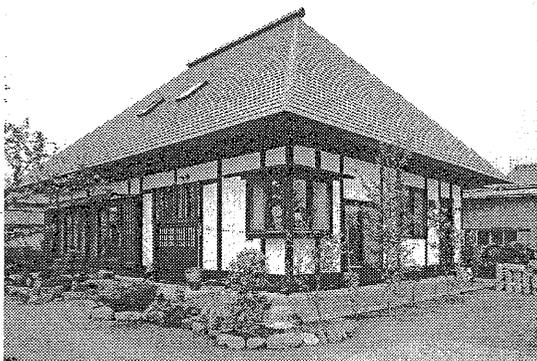
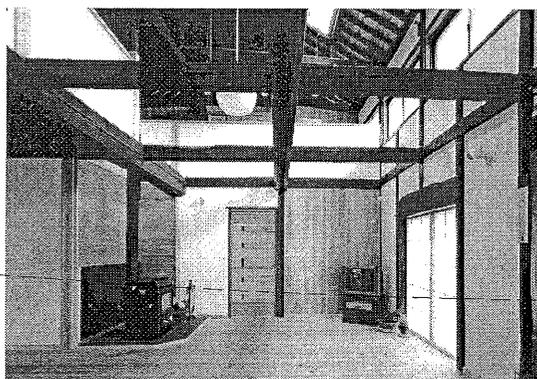
松本昌義、伊藤秀夫、日影良孝、斉藤彰、石引浩子、戎居連太、  
金田正夫、長谷川順持、飛山龍一、豊崎洋子、岡部知子、  
外岡生帆、寺田一枝、佐々伸子、吉塚幸雄、鈴木久子、岸未希亜、新井聡

# はじめに

# 語る会

今年度の事 2004年1月30日の語る会は小林一元さんをお願いいたしました。

小林さんの最近の3作品をスライド・図面を交えながら語っていただきました。



今回の語る会の感想、新しく入会されました 鈴木 伸男 さんにいただきました。

大平を語る会—初参加—

私が大平を語る会の事を知、大のは、通っている学校のパーズの講師として来て頂いている、山本七カル先生から聞いて知りました。大平の事を聞いたときに、吉田先生の事も聞き、伝説もある大平と言っていました。

それから、吉田桂二という人は、どういう人なのか、非常に興味が湧き、吉田先生が出した本を、何冊か読ませてもらいました。

その中のひとつ「家づくりの原点」を読んで、建物という器の中に、家族という物に、プライベートという壁などで、遮る必要があるのかなど、多々共感するものがあり、実際に、会って話を聞きたい、したいと思うようになり、山本先生にチャンスをもたらすことができ、それが大平を語る会でした。

当日、語る会が行われる場所に行き、やと吉田先生に会えると思っていました。しかし、その日吉田先生は出張の為、来れないと知り、ショックでした。でも、語る会に参加した事によって、小林一元さんの作品を見せて頂き、木材の架構、流れ(運動)など、いろいろ勉強になる事があり、そのショックも忘れていました。小林一元さんの作品を見終、大平に、一元さんが「設計室に1人、人を入れたい」と言、大平とき、吉田先生に会えなかつたのは、一元さんとのチャンスの為、大平の故と

勝手に想像して、ショックが喜びに変わりました。なぜかという、私は今就職先を探していて、学校でも探してもらっていますが、私が勉強したい木造建築に大平のすわる所が、山本先生にも相談したいところだ。大平ので、勝手に想像して喜んでいたので、思い、その時、山本先生と目が合い、先生も笑顔を見せられていたので、このチャンスを絶対につかむと強く思い、大平

その後、皆さん、大平の民家の事を話しているときの民家に対する熱い気持ちが伝わってきました。大平に限らず、日本のいろいろなところに残る民家、村等を保存していくという気持ち、私もその一員になりたい、と思っています。

木造建築の勉強を始めて少しの時間しか経っていませんが、これから、勉強して(王は不造)成長できたいと思っています。

語る会

# 大平宿 01

## 「これからの大平宿での活動について 2004年」

木住研・宮越（2004年大平建築塾運営委員）

昨年の大盛況で終了した第10回大平建築塾で過去10年間の活動に一つの区切りをつけようということになっていました。つまり第10回は最終回。しかし、その後の反省会や生活文化同人の総会で、来年も大平建築塾をやろうよ、という意見にまとまっていきました。それぞれの気持ちの中には、年に一度の楽しい時間はやはりなくしたくないという思いがあったのでしょうか。いや、もう少し踏み込んで言えば、今までの大平との関わりにもう一つ踏み込み切れなかったといったといった思い、現状の民家の朽ちゆく姿をこのままにしておいてよいのかといった状況への歯がゆさなど様々なものもあったのではないのでしょうか。

ならば、第10回の後に行なう建築塾なのだから今年も引き続きで第11回、というわけにはいきません。最終回を宣言した以上、今年は第1回でなくてはならないという位置づけで考えていくことが自然です。

では、大平宿とどのように関わるのかが今回、生活文化同人や大平建築塾に関わってこられた皆さん、これから関わる皆さん、それぞれが自らに投げ掛けるテーマと考えることから始めていただきたいと思っています。

既に、第1回運営会議での大きな方針としては、大平の民家をよく理解するため、および現状の痛み具合を把握するために再調査を行なうことは決めています。夏以降には、調査報告書にまでまとめることをも考えています。少なくとも大平宿9棟の民家を改修した経験を持つ私たちとしては、報告書の扱い方については飯田市への提出を含め、今後の大平宿の管理体制への提言まで踏み込めるものでありたいと考えています。（既に11年前に提案されていましたが、提案の実行には至っていません。一部資料は下記MLのブリーフケース内にアップしてあります。）多くの皆さんの参加を期待しています。今年は以下日程で計画しています。また、詳細情報はこれから随時提供していきたいと考えています。

## 第1回 大平建築塾 2004年8月7日（土）～9日（月）

- ※1 現在、大平建築塾のメーリングリストが立ち上げられています。

<http://groups.yahoo.co.jp/group/oodaira-net/>

昨年の建築塾への参加者が中心に登録されています。運営会議での報告など連絡用に活用しますが、参加者の積極的な企画や提案こそ期待するところです。現在、未登録で登録を希望される方は上記アドレスへアクセスしてください。

- ※2 次回、第2回大平建築塾運営委員会は

3月26日（金）6:30～市田邸 語る会の後に行ないます。



# 大平宿

# 大平宿 02

振り返ってみましょう 10回の大平宿

そして

これからを ソウゾウ してみましょう

## ○第1回(1994)

山村宿場の遺構を残す大平宿は、1960年に住民が集団移住した後、飯田市民を中心とするボランティア運動で保存再生を図ってきました。当初からこの運動に多くの人達と関わってきた一人としては、飯田市が実施した今回の保存改修事業は、大平もようやくここまで来たか、という感慨がひとしおです。しかしまだ保存再生の永続的なルールが敷かれたわけではありません。今年はその第1回を企画し、これを毎年開催してゆこうと考えている「大平建築宿」は、大平の保存再生をより確かなものにするを狙いとしています。このイベントそのものの目的としては、歴史的な遺構を残す集落という願ってもない環境の中で、風土の一部をなす建築のあり方を、保存と創造の問題としてとらえ、そうした永遠のテーマについて討論し、自分達の仕事の質を向上させたいとあります。大平宿の過去と現在については、詳しくは「住宅建築」誌の5月号に特集されていますが、今回の保存改修事業に関わった「大平宿設計会議」が事業の完結をもって解散し、新しく「歴史環境設計会議」として、より広い分野で活動しようとしています。このイベントを主催する「生活文化同人」は、メンバー的にはこれとかなりダブっておりますが、建築とか設計とかの範囲を越え、もっと広い生活文化という視点で活動している団体です。大平建築宿についての興味からでも結構ですし、歴史環境についての関心、あるいはまた風土と建築の関わり、そうした中で建築はどうつくるべきか、などなど、人によって関心や中身の程度はさまざまですが、2泊3日合宿してこのイベントはきっと楽しいものになるはずですよ。

## ○第2回(1995)

大平建築宿は、建築を「学」とか「術」としてとらえるのではなく、「実」ととらえての場になりたいと思っています。今年はその第2回、毎年ひらくつもりですが、その意味は、新しい問題を皆で考えてみようということ、それともうひとつは、この一年にそれぞれ考え行ってきた「実」についてレポートし、皆の実りにしようということがあります。

大平建築宿の内容の企画は、生活文化同人の世話会や事務局で考え、用意したのですが、それを聞きにくるといった消極的な参加ではなく、自分が考え行ってきたことをこの場で話してみよう、というような積極的な参加を望みたいと思います。

大平建築宿の実りは、内容が計画通りスムーズに終了して得られるものもありますが、誰が何を持ち込んでくるかわからない、そんなものがあればあるほど充実すると思うのです。そうした期待のできる会、期待に心おどらせて参加する会にしてゆきたいものです。

大平は、江戸時代中期に拓かれた脇・街道の茶屋宿です。残っている家々は、素朴ながら、緩い勾配の板葺石置屋根のシンプルな美しさを持っています。大平建築宿をここで開くことができるのは、集団移住で無住となったこの村を、ボランティア活動をベースにして守ってきた保存運動の歴史があったこと、放置しておけば、倒壊してしまった家々を守ってきたからです。大平を造ってきた人達、無住になって以後守ってきた人達、そうした人達に対して私達は、ここで大平建築宿をひらくことができることを敬意をこめて感謝したいと思います。今年もまた盛会である

## ○第3回(1996)

### 「歴史的遺産と我々の課題」

提供する、或いは提供されるという言葉がある。

それを、建築を、或いは住宅を提供する、提供されるというように使ってみると、現在の建築や住宅のつくられようの矛盾に気付くのではないか。

もしこの言葉の中に矛盾を感じとるなら、事のはじまりは発想の原点にあることに気付くだろう。初めにボタンをかけ違ふと最後までおかしいことになってしまう。

大平建築宿に集うことの意味は、発想の原点を確かめあうことだろう。

- ・基調対談「無住の集落となった大平宿」(本多勝一 VS 吉田桂二)
- ・「大平民家について語る」

前半:「大平民家の系譜と南信州の民家体系」(吉田桂二・益子昇・高橋俊和)

後半:「新築の大平民家」(岡部隆幸・中原賢)

### 分科会

- 1:「暮らしと望ましい家のありかた」  
(レポーター:長谷川順持、サポーター:斉藤彰)
  - 2:「伝統技術を明日にいかす」  
(レポーター:吉田桂二、サポーター:立松久昌)
  - 3:「環境と共棲する家」  
(レポーター:高橋昌巳+田島美沙子、サポーター:芳井浩)
  - 4:「生活の道具をつくる」  
(レポーター:羽場崎清人、サポーター:大平秀和)
- ・紙芝居「大平宿の物語」(吉田桂二)

○第4回(1997)

「近代化の功罪」

大平建築宿は、今年で4年目を迎えます。

この宿の目的に、大平宿の保存と再生があるのはいうまでもないことですが、ごく近年まで私達の生活の容器だった民家に僅か2泊3日とはいえ、住み手になることが体験できること、これがこの宿の大きな魅力であろうと思います。

そうした体験の中から、現在、私達が住んでいる家と民家との大きな対比がいくつもの疑問となつて、心の中にうずまきであろうと思

います。この対比の中から、つかみとるものがあるとしたら、それは今回の宿のテーマとして掲げた「近代化の功罪」にはありません。そうした認識こそが明日の私達の仕事の糧であるに相違ないはず

- ・基調講演「古い町並み これからの町並み」(西村幸夫)
- ・「大平宿に触れる」
- ・自然を食べる  
(吉崎英博氏をリーダーに山で野草を採集し天ぷらにして試食)
- ・樹木の伐採  
(飛山龍一氏をリーダーに木を伐採)
- ・大平宿のガイド  
(吉田桂二氏が大平宿を説明)
- ・分科会
- 1:「町づくりの様々な作法」  
(レポーター:八甫谷邦明、サポーター:松井邦夫)
- 2:「住民参加のまちづくり」  
(ファシリテーター:藤原惠洋+後藤朋子)
- 3:「古建築の修復と現代の工法の展開」  
(レポーター:渡邊隆、サポーター:小林一元)
- 4:「自然を遊ぶ」  
(レポーター:羽場崎清人、サポーター:岡部知子)
- 5:「ドイツの郷土保護とエコロジー運動」  
(レポーター:赤坂信、サポーター:益子昇)
- ・二人芝居「風の伝説 レジェンド(宮沢賢治作)」(劇団風の街)

○第5回(1998)

「今、環境は」

終わりを迎えようとしている20世紀は、人間がより豊かな社会になると信じて、築いてきた文明が、その実、かつてなかったほどの、地球の存在すら危うくする規模での、環境破壊を招いてしまった時代でした。21世紀の扉を開く時のキーワードが、環境保全でなければならぬことは、誰しもの想いであるに違いありません。

建築のあり方も、この問題を避けて通ることはできないと思うのです。第5回、今年の大平建築塾のテーマを、「今、環境は」としたのも、できるだけ多くの人が、この問題を自分の問題にしなければ、決して解決できないと考えるからです。

大平建築塾はこれまで、人の輪をひろげるイベントとして、実績を積み重ねてきました。今年もまた、有意義な時間を、多くの人達と共にしたいと思

います。私達が守ってきた廃村、大平宿の姿は、訪れた人に何物かを考えさせ、そこでの3日間は忘れられない時空間になるはず

- ・基調講演「今、環境は」(宇井純)
- ・分科会
- 1:「環境と開発」  
(レポーター:吉田桂二、サポーター:長谷川順持)
- 2:「母性と建築」  
(レポーター:豊崎洋子、サポーター:内藤敬介)
- 3:「地域文化の自然観」  
(レポーター:黒川恵、サポーター:江原幸彦)
- 4:「写真」  
(レポーター:近清武+須崎祐次+佐藤しんいち、サポーター:日影良孝)
- 5:「大平の川遊び」  
(インストラクター:羽場崎清人、サポーター:寺本雅男)
- ・コンサート「アイヌ音楽の夕べ」(オキ+鈴木キヨシ)

# 大平宿

# 大平宿 03

## ○第6回(1999)

### 「町づくりの詩(うた)」

今年の生活文化同人の行事テーマは、「町づくりの詩」である。

町づくりという言葉には、既に手垢が付き過ぎていて、環境破壊に近い行為でさえ、この言葉で美化されていることがある。21世紀が、環境問題を人類が克服すべき命題として、幕をあげようとしている現在、環境保全が大合唱になりつつあることの中にも、この是非を問う叡智を必要としている。

美化された言葉ではなく、具体的な行為の中に、真実を求めることが、建築をより健全なものにしてゆくに違いない。

大平建築宿に集うことが、美化された言葉の集合であるなら、それは単なる仲間意識の確認に終わるであろう。

言葉の中にある真実を純化することが、自分にとって重大事であるという意識があれば、大平での集合は、参加者それぞれの、個人的な蓄積として結果するに違いない。

そうした意識を込めた参加を期待している。

- ・基調講演「地域の町づくり」-「谷根千」工房の活動を通じて- (森まゆみ)
- ・「きこりの体験-木を切る・山の話-」 (飛山龍一)
- ・分科会
- 1:「町づくりと技術者の役割」 (吉田桂二)
- 2:「模型づくり」 (寺本雅男)
- 3:「母性と建築」 (豊崎洋子)
- 4:「ピンホール写真」 (畑亮)
- 5:「自然と遊ぶ」 (羽場崎清人)
- ・ジャズコンサート「炬ぼたじゅずらいぶ」(Be-spell)

## ○第7回(2000)

### 「環境の自分化」

21世紀を迎える年である。20世紀が、機械文明の究極の姿として、環境の絶望的破壊に立ち至って終ろうとしているとき、来るべき世紀に、人類に課せられた命題の最大のもので、環境保全であることは既に明白である。

未来がどうなるか、と問いかけることは無意味な思考といってよい。未来をどうするか、論理の行動化が求められている。

大平宿は、集団移住によって放棄されて以後30年、多くの人達の保存再生への関与がなければ、現在の姿はなかったであろう。ここに残されてきた民家群は、遠い過去から、この地に命を刻み込んできた人達の、生活の歴史を実証する存在であることに加えて、保存再生の歴史をさらに30年、堆積させてきたことも、既に継承すべき歴史になってきたと、自負してよいだろう。このことを論理の行動化と理解して間違いない。

大平宿の保存再生活動が、環境保全に結ぶことはいままでのままでもないが、この活動は「おしかけ保存」の異名をとる、他人の所有物に不当に干渉する行為であったのかもしれない。しかし、環境の破壊に際して、これを保全しようとするれば、環境を自分化するという意識がなければ、行動することはできない。

この自分化の意味には、もちろんのこと、私欲のための私有化という意味はなく、むしろその対極に相当する。誰もが自分化することによって、社会の共有物にしてゆくことができるという、行動化の論理によって成立する概念である。

大平宿の保存再生は、今までのままで経過してゆけばよいのだろうか。21世紀に継続してゆくことを考えれば、永续性に多量の不安を残している。今回の「大平建築塾」のテーマは、全会を通じて、このことに焦点を結ぶべく企画されている。

そのためには、参加する人達のそれぞれが、大平宿を前記の意味で「自分化」することが原動力となる。それは単に大平宿を対象としたところ止まるものではなく、環境保全活動のすべての原動力であろう。

やや難解であったと思うが、第7回「大平建築塾」のメインテーマを、「環境の自分化」とした意味は、以上の次第からである。

- ・基調講演「環境における「時間」の問題」(内山節)
- ・全体会議「大平の保存と再生、そして創造は・・・」  
(吉田桂二、桜井善実、米山淳一、羽場崎清人、松村茂利)
- ・分科会
- 1:「保存と再生」 (吉田桂二+降幡廣信)
- 2:「復元と技術」 (戸張公之助)
- 3:「継承と創造」 (小林一元+日影良孝)
- 4:「木こり体験」 (羽場崎清人+田中淳司+飛山龍一)
- ・公演「胡弓演奏会」 (ラコウ、チャン・ウェイ・ウェイ)

○第8回(2001)

「環境再生は可能か？」

21世紀を迎えた人類が当面する最大の課題が「環境」にあること、既に議論する必要もないほど、自明のことになっている。

今や「環境保全」はあらゆるメディア、また商品のPRにも、このことに触れないものはない、といってよいほどの大合唱になってきている。しかし、この言葉の中身は明らかであろうか。これだけの合唱になっているのなら、「環境保全」の実は着実に上がってきてよいと思うのだが、果たしてそれは期待してよいであろうか。

保全すべき環境とは何か、その実体が見えていないまま、言葉だけが飛び交っているのだとしたら、いかに大合唱になろうとも何も変わらないという、恐るべき結果しかないのではないかと。

環境を構成している要素は、数えきれないほどである。すべてに対して考えよといわれても、限度があることは確かだ。しかしそれをよいことに、というよりはむしろ、自分に都合のよいことだけに注目して「環境保全」をうたい上げているように思えてならない。

環境を構成している要素は、すべて整合しているわけではない。多くの矛盾を含んだものとして存在するのだから、近視眼的に見るだけでは決して実体を知ることはできないと思う。

この建築塾の諸会合の中で、この話題を議題することは不可能であるけれども、各人の心の中にこの問題を据えておけば、さまざまな人と人のふれあいの中で、自分なりにその理解を深めていくことができると思う。それが自分にとって成長の糧となるのである。

・基調対談「歴史的建造物の保存と再生の技術」(吉澤政巳 VS 吉田桂二)

・分科会『つくる』

1:「なんでも材料手染め」(豊崎洋子)

2:「木でつくろう」(飛山龍一)

3:「環境保全いろはカルタをつくる」(鈴木久子)

・分科会『レクチャー』

1:「電子情報時代の落とし穴」(宮越喜彦)

2:「伝統技術の将来像」(益子昇)

・公演「百鬼人形芝居 どんとろ」(岡本芳一)

○第9回(2002)

「自然環境保全と木材資源の活用」

衣食住の全般にわたる化学物質による汚染は、住宅空間においては「シックハウス」症候群と呼ばれるなど、多くの人達の告発によって根絶に向かいつつあります。

農作においては「有機農法」、建築においては「自然素材」が、時代を先取りしたものとして評価を高めています。これは良いことであるに違いありません。

しかし、評価を高めているということは、それを商えば「儲かる」ことを意味しているため、「この際これで一儲け」とか、「羊肉肉肉」の商法が混入しつつあることも事実です。これは「環境保全」という全人類の命題からの逸脱でしかありません。

このため、生活文化同人では、『今、何故、木にこだわるのか』を、今年のテーマとし、例会を開いてきました。今年の「大平建築塾」は、このテーマについて、もっと多くの人達と共に語り合うことで、参加した人がそれぞれに、より本質的な理解に至ることを目標として開きます。

基調講演をしてくださる木原啓吉さんは、大平宿の保存再生運動を、朝日新聞の1ページ大の大きさで最初にキャンペーンしてくださった恩人です。

それから30年の年月が経ちました。

その年月は何を意味しているのでしょうか。

大平宿にとっては記念すべき講演です。多くの方々のご参加を求めます。

・基調講演「木の文化」(木原啓吉)・特別講義「木造建築の秘伝おしえます。」(吉田桂二)

・分科会

1:「地域材活用型住宅」(石川毅、聞き手:吉田桂二)

2:「なぜ、国産材にこだわるのか」(小川耕太郎)

3:「散策「天然林」」(田中淳司)

4:「三重の林業事情と私の取組み」(堀内広樹)

・公演「アフリカン太鼓」(わきたにじゅんじと「ニヤニング」)

○第10回(2003)

「保存と創造を結ぶ」

学生時代に学校で木造建築術について学んだ人がいるだろうか。

設計課題においても只の一回程度に過ぎないであろう。

これは今に始まったことではない。おそらくは明治に大学教育が始まって以来のことであろう。木造は大工に任せておけばよい。と教師達は言っていたはずである。

しかし今、機械で住宅を造ることが普遍化し、大工の熟練度に依存してきた伝統技術は殆ど滅亡寸前の危機的状況にある。

木造建築に依存してきた者にとっては、この状況にどう立ち向かうべきか。伝統技術は従前のものを造ることで成立してきたが、それを、従前のままの建物を造ることのみに生かされるのであれば、それは博物館行きの技術になりはてるであろう。

ここに現在の「保存と創造を結ぶ」命題がある。このテーマをより広範に深めてゆくためのきっかけを、この「大平建築塾」に期待したい。

・基調講演「保存と創造を結ぶ」(吉田桂二)

・分科会

「集落のデザインエッセンスを今に生かす」

(長谷川順持)

「ひとたち折り紙の創作、実演」

(山本厚生)

「建築家 吉田桂二分析」

(岸末希亜+戎居連大)

「伝統的木造技術の課題と可能性」

(宮越喜彦+小林一円)

・公演「津軽三味線」

(山本竹勇)

大平宿

# 私の近作

連合設計社市谷建築事務所  
 設計：吉田桂二  
 担当：金刺元臣

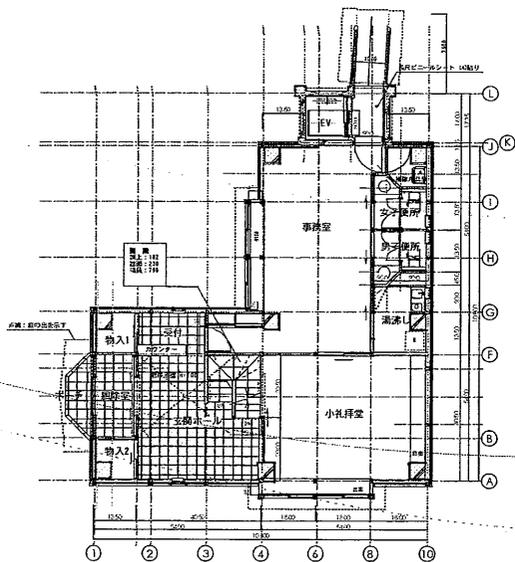


今井館第二資料館	
◇建築主	NPO 今井館教会会
◇所在地	東京都目黒区中根
◇敷地面積	666.41 m <sup>2</sup>
◇建築面積	95.13 m <sup>2</sup>
◇延床面積	264.31 m <sup>2</sup>
◇構造・規模	木造・RC造 2+B1階建て
◇竣工	2002年3月

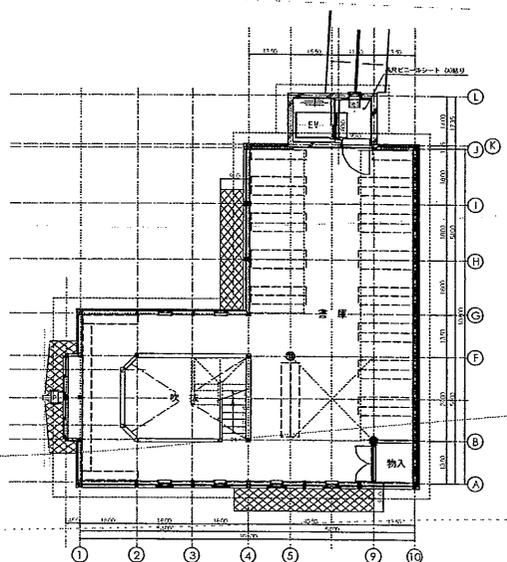
内村鑑三氏が生前使用していた聖書講堂に隣接。  
 (彼は無教会主義のキリスト者なので教会とは呼ばなかった)

聖書講堂はこのほど登録文化財に指定された。建物は地階を含む3階建であるが、書籍など重量物が多く收藏されるので、2階床までをRC造とし、その外部に木軸を建てめぐらせて、木造の屋根を架けている。

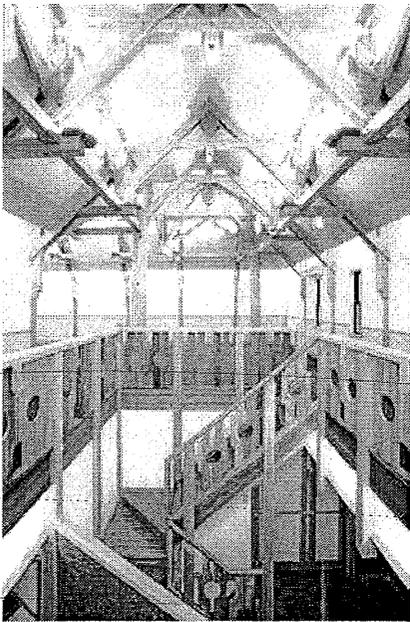
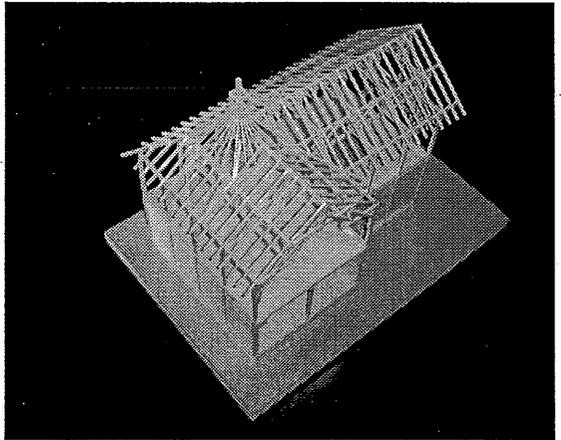
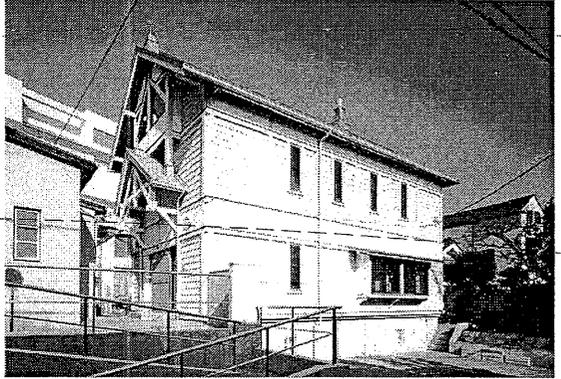
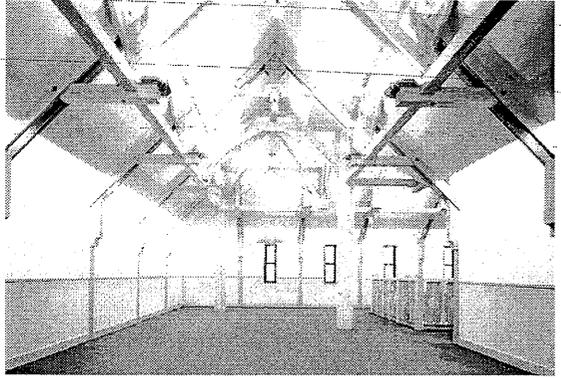
建物の外観は明治西洋館をイメージさせる形にしている。2階が主たる展示室なので、2階に入ると吹抜けにより木造トラス組の空間へと接続される。



1階平面図 1/100



2階平面図



近作

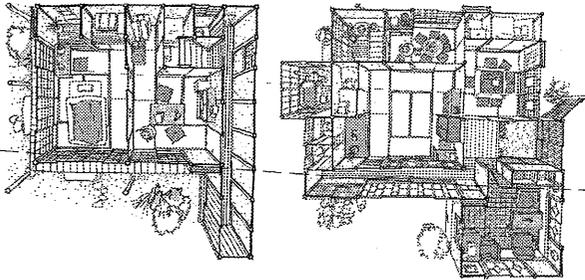
# NEWS

## 図と絵で綴る 21 世紀への遺言「間取り百年」

間取り百年 生活の知恵に学ぶ

吉田桂二著 彰国社

(日本図書館協会選定図書)



### 【目次】

#### 間取り百年年表

- 1 明治中期から末期まで—1900～1912
  - 間取りの100年は民家の時代から始まる ●普通の人は家を建てなかった時代
  - 古河藩の家老が住んだ武家屋敷 ●巨大な屋敷構えの大庄屋の家
- 2 大正の全期—1912～1926
  - 町屋は「しもたや」が生業のため、使いこなされる家であった ●大都市に自力で建て始めた一戸建純住宅
  - 鉄筋コンクリート造のアパートの出現 ●農家は民家の時代が続いていた
- 3 昭和元年から二〇年まで—1926～1945
  - 長屋住まいの都市生活者が急増 ●その頃建てられていた東京の一戸建純住宅 ●郊外住宅地の商店街と小さい店舗住宅
  - 昭和一六年になってさえ、四国の山間部では民家が建てられていた
- 4 原点生活の時代—1945～1950
  - 衣食住のすべてを失ったところから戦後日本が始まった ●東京での過密居住と生活物資不足のありさま ●東京の郊外住宅の様相
- 5 台所革命の時代—1950～1960
  - 家庭電化製品の大量の需要の拡大が住宅改変の扉を開く ●その頃の住宅あれこれ ●農家では生活改善としてのDK化が進行した
- 6 建築家たちの小住宅時代—1950～1955
  - 「これからの住まい」を求めた建築家たちの試み ●これからの住まいに求められる指標の提案
  - 建築家たちの小住宅時代は短かったが、新しい時代を拓くための先駆となった
- 7 住宅産業化の時代—1955～1980
  - 「工業化立国」の住宅版、住宅の機械工業生産化始まる ●その頃、勸銀ハウジングセンターで建てた住宅の七戸
  - 小住宅時代から一四年かけて、住みながら建て替えていった例 ●店舗併用住宅と地方での住宅の姿
  - 小住宅が若い建築家の登竜門となった
- 8 ハウスメーカーの時代—1975～
  - 住宅産業化の進行は住宅の既製品化を招来した ●注文住宅を建てる需用者の意識の変化と職人技術の空洞化
  - ハウスメーカーの建てた家の五例 ●アメリカ型住宅である輸入住宅が建ちはじめた ●木造住宅の三階建が始まる
  - 人口の高齢化で増える高齢単身者居住
- 9 町への視点—1980～
  - 「二世帯住宅」の出現 ●町並み保存運動が広範化してくる
- 10 民家再生の登場—1990～
  - 町並み保存が波及した単体保存として
- 11 環境保全の時代へ—2000～
  - 自然素材を使った健康住宅への転換が始まる ●機械生産化された住宅を告発する五つの大罪
  - 生活のエコロジー化がなければ環境保全の時代は来ない

## 「とんでもない世界に飛び込んで・・・」

桂設計工房  
所員 五十幡智子

30歳を目前に決心をしました。自分が今一番やりたい仕事、建築の仕事をしよと・・・。  
20代半ばからむくむくと芽生え始めてきた「このままでいいのか？」という思い。只過ぎていく毎日に、「これから自分は どうしたいのだ？何がしたいのだ？」と考えるようになりました。

仕事を辞める決心をするまでは、スタートが遅いことに不安な自分に、「人よりやりたい事が見つかるのが少し遅かっただけ！一生の事を考えたら・・・」と自分自身に言い聞かせ勇気づけていました。

十年勤めた会社を辞め、小さな専門学校に入りました。年齢の異なる同級生との二年間は、とても刺激になりました。長いようであった二年間の学生生活も今日振り返れば、あっという間で学校の授業といえればカリキュラムをこなすのが精一杯、なかなか生の建築に接する機会はありませんでした。今ではそれが悔やまれます。

今の事務所に入ってから私は今までに経験の無い程、涙しました。「私ってこんなにびい〜びい〜泣く人だったっけ？私が社会人として過ごしてきた時間はなんて楽だったのだろう」と思いました。はっきり言って「なんて厳しい世界に飛び込んでしまったのだろう」と考えました。

最初の頃は中途半端な自分を指摘されればされる程、「自分はなんて不甲斐ないのだろう」という思いと、「そんなにできない人間なのかな」と涙・涙・涙でした。「涙は卑怯だ！」と一喝されることもありましたが、それも干分分かってい

るつもり、でもジュワ〜と涙があふれてきました。

現在、事務所に入って二年が過ぎました。いつしか涙の出る回数もだいぶ減ってきました。

今の事務所に入り自分自身について、考える機会を与えられました。私の足りないところがむき出しになりました。あまり本心を出さない・争いはさける。いつも事務所で指摘されるのはこんな私の弱い精神面でした。

家には、建主さんの多くの思いが込められます。今までの私の考えではダメということを感じてきたように思います。

どちらかというマイナス思考の私。気持ちはもちろんプラスでいきたいと思うのですが・・・。行動を起こす前に、「こうするといいか」と思いながらも「ちょっと、出しゃばり過ぎかな？」なんて一人で考えてしまうのです。

自分で良かれと思った事は、まず行動。注意されたら次は同じミスを繰り返さない。この方がよっぽど気持ちがよい。ミスを恐れたら前には進まない。

長い間で身に付いた悪い習慣や良くない物の考え方はすぐに180度転換は難しいものです。まずは、素直であることを心掛けようと考えています。

只今、なにより自己改革中。少しずつではありますが自分が変わりつつあるような気がします。

こんな、発展途上の私にとっての「家」とは何なのか、どんなものなのか考えてみました。

二年間を通して己を見つめ建築の仕事に携わって考えた事は、私は建主さん、そして自分にとっても心に残る家づくりをしたいという事です。

人にはそれぞれ「この場所が好き・こんなところが好き・ホッ！とする」という空間があると思います。ある建主さんが、こんな事を言っているのを耳にしました。「家に帰ってくると、ほっとして眠くなるのですよ。」最高の褒め言葉だと思いました。私もそんな家、場所をつくることに関わることができたらと考えています。

その為にも今は、自分改革奮闘中の私です。

# NEWS

# NEWS

## フランス寸行

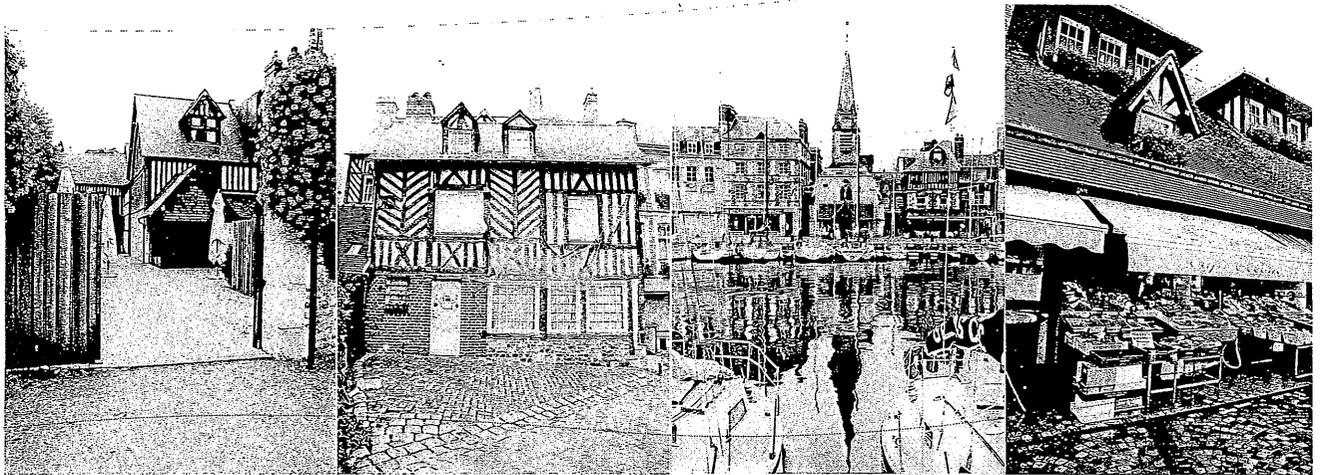
岡部知子

贅沢すぎる雑踏を抜け出し、シェルブール行きの列車に乗っている。SNCF と呼ばれる国鉄の列車はル・アーブル駅に到着した。「旅」の始まりはここからと、不安ながらも胸を張った。駅に隣接したバスターミナルは閑散としている。静寂の待合所には、1組の若者グループが何やらヒソヒソと話してはクスクスと笑っている。その向かいには、初老の婦人が仏像のような顔で天井を見つめ、発券所へ向かう私の足音が異邦人の訪れを知らせていた。暇そうな切符売りは嬉しそうに「ボンジュール！ マダム」と声をかけ、その声はシーンと静まりかえった待合所に響きわたった。私は蚊の泣くような小さな声で、「オンフルール、シールバブレ」と返した。今回の予定は、中世の港町オンフルール、ドゥービルの二つの町をめざす。パリ市サン・ラザール駅（口語ではサラザールと発音していた。）から、ル・アーブル駅まで約2時間の旅。車窓から眺めるセヌ川は想像した以上に憂いをおびていた。初秋を川面に写した風景に、フツとため息が漏れてしまう。セヌ川は見え隠れしながら、広大な牧草地とのコンビネーションを繰返している。どこかの美術館にありそうな情景に、次第に酔っている自身を手放して認めていた…。私にとって訪欧は生まれて初めての経験であり、その準備には必要以上に心力を費やしていた。それゆえ、私の心はまさに童心そのものであり、そこに音の無い場面が、感動的に車窓を流れた。

ル・アーブル駅からバスで30分も走ると、オンフルールの集落に入る。視界の戸数は100戸前後だろうか。新築中の家も数戸見られる。しかし、圧倒的に旧家が多くその大半がティンバーフレームと石造りであった。バスを降りて1軒、1軒写真を撮って周りたい衝動に駆られる。終点に着いたら折り返してこの集落を見に来ようと心に決めていた。写真で見た棟の上に植物が生えている家も見える。が、あまりに遠い。終点に着くまで1つの山、半島を越さねばならない。そして目的地オンフルールの港町にタクシーが1台も無いことに気付き、引き返しは断念。

バスターミナルは岸壁のすぐ横に隣接、ここもまたル・アーブル同様、待合ホールに人影は無い。初秋の海風が想像以上に冷たい。ドキドキしながらあたりを見渡すが町らしきものは一向に見えない。写真と違う…。乗客の後に理由なく続いた。百年はゆうに経っていると思える公衆便所のわきを何故か乗客たちはすり抜けていく。駐車場を横切り、10件ほどのレストランの前を過ぎ、左へ曲がった途端、「絵のような風景」が目飛び込んできた。「古〜い」と大声で叫びたくなった。「家が生きてる〜」とその光景に涙が出そうになった。言葉にもできない夢の現実がここにあった。つかみどころのないファンタスティックが売りの作曲家エリック・サティが、ほんの少しだけ解かったような気がしてくる。15世紀における対イギリスとの百年戦争時代、ここは重要な港湾の町として貴重な存在であったという。そして、町並みはその当時と基本的に変わっていないという事に感服する。町並み保存活動を見てきた日本での自身を振り返ると何故か空しい気持ちがよぎってしまう。日本の現状を否定しているのではない。あまりにも違う民族性そして歴史観。なぜここまで感動してしまうのかも解からぬまま、シーフード料理で有名な高級リゾート地ドゥービルの町へ向かった。

ドゥービルの歴史はオンフルールとほぼ同じ歴史・文化を受け継いで来たという。しかし、歴史、経済は完全にルーアンへと移り、北部都市ルーアンはル・アールに次ぐ中心的都市となっているらしい。北西にあるモンサンミッシェル（観光地）、北東に位置するオンフルール（観光地）の中間に位置するドゥービルは町としての機能を失い、無残なまでの姿をさらしていたという。20数年前、フランス政府のテコ入れで町は豹変した。古い建築物のほとんどは取り壊され、斬新な町に生まれ変わり、政府ご用達のシーフードレストランが軒を連ねたのである。町並み保存に興味をもって10数年が流れた。わが国にもリゾート施設らしきものが全国に数多く生まれ、各々しつかり問題・課題をかかえ、四苦八苦しているのが現状。しかしこちらでは漁師、農家、商家。町総ぐるみで変えてしまうところにビックリしてしまう。フランス国内には、こうしたケースがまだまだあるのだろうし、世界にはもっと例があるのだろうと思うと私の旅は当分続くのかも知れない。



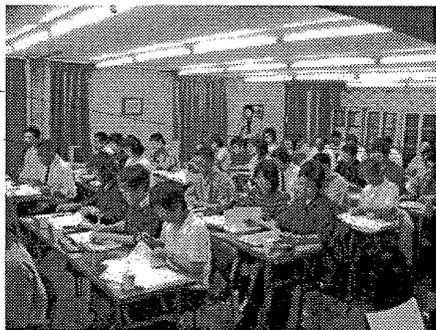
# NEWS

## 平成16年度「吉田桂二の木造建築学校～設計技法の修得～」募集要項

- ・ 講 師 吉田桂二（建築家／連合設計社市谷建築事務所代表取締役）
- ・ 主 催 連合設計社市谷建築事務所
- ・ 期 間 平成16年5月～平成17年2月 合計6回 13:00～17:00
- ・ 対 象 建築の実務に携わっている方で、  
講座を履修し、課題を全て提出する意思のある方
- ・ 目 的 木造建築の基本的な設計技法を修得する。
- ・ 会 場 連合設計社市谷建築事務所内会議室  
〒102-0071 東京都千代田区富士見2-13-7 JR飯田橋駅より徒歩5分  
参加していただく方には、地図をお送りいたします。
- ・ 定 員 40名（先着順）
- ・ 募集期間 平成16年3月20日（土）～4月25日（日）
- ・ 会 費 入学金10,000円＋受講料90,000円 計100,000円 一括前納  
継続履修の方は、入学金は免除となります。
- ・ 申込み・問合せ 連合設計社市谷建築事務所内事務局  
担当 戎居 連太（えびすい れんた）、岸 未希亜（きし みきあ）  
TEL：03-3261-8286 FAX：03-3261-8280  
E-mail：rengou-sekkei@tokyo.email.ne.jp

申し込み用紙は連合設計社市谷建築事務所のHPからダウンロードしてください

<http://www.rengou-sekkei.co.jp>



## 【学校年間スケジュール】

- 講座は、設計技法に直接関わる内容を事例や資料を通じて解説していきます。
- 課題は宿題形式とし、定められた期日に連合設計社事務局宛に提出していただきます。
- 全ての課題を添削し、次回の講座で講評を交えながら設計技法を示していきます。

第1回 平成16年5月8日(土) 13:00 ~ 17:00

- ・開講式 設計技法の前提条件の解説 課題①の説明
- ・『居住空間の平面的広がりと架構』

課題【単体架構（平屋建）】

課題①提出締切05月25日必着

第2回 平成16年6月26日(土) 13:00 ~ 17:00

- ・課題①の講評及び課題②の説明
- ・『居住空間の立体的広がりと架構』

課題【単体架構（総2階建）】

課題②提出締切07月21日必着

第3回 平成16年8月28日(土) 13:00 ~ 17:00

- ・課題②の講評及び課題③の説明
- ・『小屋組と床組の方法』

課題【複合架構（平屋建+2階建）】

課題③提出締切09月28日必着

第4回 平成16年10月23日(土) 13:00 ~ 17:00

- ・課題③の講評及び課題④の説明
- ・『床高の構成と架構』

課題【複合架構（複合型）】

課題④提出締切11月16日必着

第5回 平成16年12月18日(土) 13:00 ~ 17:00

- ・課題④の講評及び課題⑤の説明
- ・『内外空間の連続性と架構』

課題【特定の用地に設計（卒業課題）】

課題⑤提出締切01月18日必着

第6回 平成17年02月19日(土) 13:00 ~ 17:00

- ・卒業・修了認定課題⑤の講評
- ・『開口部の手法』

# これからの会報と . . .

## これからの生活文化同人会報について

WEB上での新しい展開を目指します。

基本的に紙面での会報は、今回の発行で最後と考えています。

インターネットの急速な発展と普及に伴い、その特性を活かした新しい会員同士のコミュニケーションを考えております。

これまで、一部の会員（世話人）のもとで「会報」の情報収集・レイアウト・印刷・製本・発送というカタチをとって参りました。

一部の会員による発信であり、ほとんどの会員が受身となるカタチになっております。

今回、会報を担当するにあたってそのような形式で発信するのは終わりにしたいと考えました。

100人を超える会員の全員が生活文化同人として参加できるカタチを取ればと思います。

つまりインタラクティブにお互いが情報を発信し、共有するカタチです。

作品の発表の場であり、大平宿をともに考える場であり、旅行の記録やその他、個人個人のさまざまな出来事、気持ちを伝える場所。

対する質問・感想などの意見交換。そのリアクションも文面だけではなく写真・図・スケッチ等を取り入れることも可能です。

これまで遠隔地で語る会に参加できなかった会報会員も「参加」のできる「場所」です。

紙面の会報以上に発信できる情報量もスピードも期待できます。

(たとえば写真もカラーになり、音声、映像等、図面だけでは伝えにくいものが掲載できます。)

何より、いつでもどこでも閲覧、そしてリアクションが可能となります。

これまでの形式からのストレスは多分にあると思われます。

また、新しい形式が安定するまで不備もあるかと思えます。

そんな不備もお互い提案・指摘・改善し全員で  
よりよい「場所」を構築できればと考えております。

新しいカタチでの展開・発展にご理解・ご協力をいただければ幸いです。

今回の会報はこれからホームページ上で掲載される内容の提案書として、まず代表である連合設計社・吉田桂二の近作・ニュース・新著などの発表をしています。

これから会員がこのような内容をWEB上で発信していけたらと願っています。

それぞれ個人のHPへ相互リンクも行い、セミラチスな相乗関係がWEB上で展開できればと思っておりますので、どしどしアドレスをご連絡ください。

また掲載したい情報は会報を担当する佐々木・大塚にメール・郵送等で送っていただければ、それはもう光の速さでHPを更新いたしますよ（たぶん）！

佐々木：citrohan@r.email.ne.jp

連合設計社市谷建築事務所：102-0071 東京都千代田区富士見 2-13-7

tel：03-3561-8286 fax：03-3261-8280

連合設計社：佐々木・大塚

<http://www.rengou-sekkei.co.jp/doujin.html>

(仮設)

これから

# おわりに

## 2004年会員登録更新のご案内

生活文化同人のホームページを立ち上げました。同時に『Yahoo!グループ』を利用し、ネット上に情報交換の場を設けました。今後は、この機能を活用しメーリングリストやデータ配信を行いたいと思います。

同封いたしました[2004年生活文化同人登録書]に必要な事項を記入し、FAXまたはE-mailでお送り下さい。現会員の方も、『Yahoo!グループ』に登録いたしますので、お送り下さい。ご入金を確認し次第、登録となります。それに伴い、会報も今後はデータ配信といたします。今年より年会員の方の会費を下げました。

### 1. 年会員 (5,000円/年)

- ・語る会聴講、会報の講読
- ・すべての同人の活動情報を会報以外にも提供します。

### 2. 会報講読会員 (3,000円/年)

- ・会報の講読
- ・語る会に参加する際は、その都度参加費をお支払下さい。

### 3. 語る会聴講 (一般:2,000円/回、学生:1,000円/回)

- ・年会員以外の方は、その都度参加費をお支払下さい。

○ 年会員・会報講読会員は1月から12月までの年単位といたしますので、途中入会の場合も上記の会費をお支払下さい。

○ 入会ご希望の方は、同封の[2004年生活文化同人登録書]に必要な事項を記入し、FAXまたはE-mailでお送り下さい。

○ 会費納入は以下の口座にお振込み下さい。(手数料は各自ご負担願います)

郵便局 総合口座 10010-54101181

生活文化同人代表 吉田 桂二

○ ご不明な点やご質問は新事務局までお問合せ下さい。

小林 一元

小林一元建築設計室

〒369-1203 埼玉県大里郡寄居町寄居1184-1

TEL:048-581-2426 FAX:048-581-9644

E-mail:[e-sumai@vorii.or.jp](mailto:e-sumai@vorii.or.jp)

※ 生活文化同人はボランティアにて運営されている会です。  
滞りない運営のために、会費の納入は3月末までにお願いいたします。

## 第二回 語る会

語り手

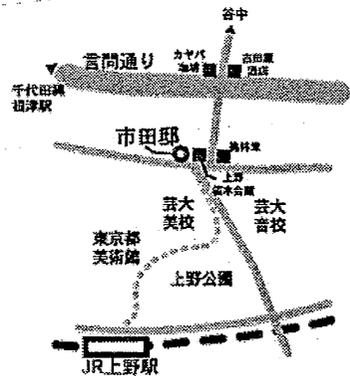
連合設計社市谷建築事務所

岸 未希亜

テーマ

「吉田流」

日時：3月26日(金) 午後6時30分から  
場所：谷中 市田邸  
東京都台東区上野桜木1-6-2



# おわりに

生活文化同人には前身である組織があった。パッシブ

ソーラーにまつわる人達がつくったグループであった。

それが同人へと昇華したのである。

グループに新しく参加する人が増え、パッシブソーラー

の枠にとらわれない重要性を感じての変革であった。

大平宿の集会を昨年を最終回にしたのも、大平が保存再

生の意義ではじまったことを思えば、現段階はすでにそ

の目標は影をうすめていると考えてのことだ。

では今は何がそれを超えるものとして指摘できるか。こ

の問いかけは同人の活動に対しても言えることであろう。

組織は明快な目標を、それもこれからの時代を見すえて

の目標が必要だと思う。その意味で組織は常に変革すべ

きものなのである。

生活文化同人代表 吉田 桂二